

京都大学言語学研究

第19号

序 言	1
論 文	
Roots in Modern Hebrew	Tsuguya SASAKI 3
Latin <i>-issimus</i>	Kanéhiro NISHIMURA 33
A New <i>Cakrasamvara</i> Text in Uighur	Abdurishid YAKUP 43
キルギス語の使役文について	大崎 紀子 59
応答やあいづちに用いられる照応的な「そう」について： 談話データにみる自然な対話の特徴	北野 浩章 79
アイデンティティと言語変容 —チュルク化のプロセスをおって—	藤代 節 95
古典的類型論と比較統語論 —日本語動詞形態の分析を通して—	酒井 弘 117
ロシア所蔵ウイグル語断片の研究2 『阿含経』『千字文』『阿毘達磨俱舍論実義疏』	庄垣内 正弘 147
研究ノート	
マラヤーラム語のいわゆるSupineについて	家本 太郎 193
京都大学言語学懇話会 2000年度活動報告	201

2000

京都大学
大学院文学研究科
言語学研究室

序言 一名称変更のこと一

本誌は、前号までを『言語学研究』、英名 *Linguistic Research* といった。このシンプルな名称は、響きは佳いが、有名人の名刺のようで、肩書きも住所もなく、ちょっと偉そうにみえる。しかし、実際のところ、あまり有名ではない。

論文の価値は内容の良し悪しによって決まるのであって、掲載誌に拠るものではないことは誰もが承知している。いまさら名称変更など自意識過剰の感もある。だがこの大きな名称は掲載論文の利用者にしばしば不便を与えてきた。特に海外の研究者は引用論文に付された *Linguistic Research* あるいは *Gengogakukenkylu* を探すのに随分苦勞する。論文引用者が発行所を記載しなかったために起こるのであるが、日本では広く知れ渡った名称と思ったからにちがいない。国内でも『言語学研究』の誤植ではないか、との問い合わせを受けたことがある。20 年も冠された名称だけに若干惜しい気もするが、変更による実害もそう多くはなかろうと判断して、本号から『言語学研究』の前に「京都大学」を立てることにした。素性を露わにし、一目で発行場所と成立基盤が解るようにした。

コンピュータの発達により今ではほとんど使われなくなったが、かつて「京大型カード」というのがあった。この「情報整理カード」は 11 本の横罫の入った B6 サイズで使いやすく、京大構内だけでなく全国で（多分海外でも）売られていた。『京都大学言語学研究』は名実ともにローカルであるが、やがて「京大型カード」のように広く一般に利用される雑誌に成長することを期待している。

庄垣内正弘

「京都大学言語学研究」(20号)の原稿募集について

「京都大学言語学研究」(20号)の原稿を募集します。投稿される方は次の執筆要領によりご提出ください。

執筆要領

1. **提出原稿** 論文は完全原稿を提出すること。採用論文については後日フロッピーディスク(MOディスク, CD-Rも可。機種を明示すること)を提出する。
 - (1)原稿枚数 日本語論文は明朝体12ポイント(1行37字程度)・35行/ページ, 欧文論文は12ポイント・35行/ページ(1.5スペース程度)で, 図表などを含めA4版用紙30枚程度とする。
 - (2)原稿の余白設定等 各ページのマージンを上下左右:30, 35, 30, 30mmとり, ページ番号を印字しないこと。ページ番号は, 右下隅に鉛筆で記入する。
 - (3)タイトルと氏名 1ページ目はじめにタイトルと氏名(中央揃え)を入れること。タイトルは14ポイント太字とする。なお, タイトルの上部には2行分の余白を設け, タイトルと氏名の間に1行分, 氏名と本文はじまりとの間に2行分の余白を設ける。
最終ページに氏名(ひらがな)と所属を括弧内に入れて右寄せしておく。
e.g. (やまだ なにがし, 京都大学)
但し, 欧文論文の場合は最終ページの氏名を漢字書きとし, 漢字表記できないときはカタカナ書きとする。
 - (4)注について 注は通し番号をつけ, 各ページの末尾におくか, または論文末に一括しておく。文字サイズは10~11ポイントとすることが望ましい。
 - (5)要旨 英文でA4版用紙1枚程度の要旨を付ける。タイトルと氏名の体裁については上記(3)に準ずる。要旨文はじまりの左上部に**Abstract**と太字で表記し, 要旨文はじまりとの間に1行分の余白を設けること。なお, 英文論文の場合は要旨ページにタイトルと氏名を入れない。
2. **採否** 原稿の採否については, 編集委員会で決定させていただきます。
 3. **原稿締切日** 2001年8月31日必着
 4. **投稿先** 〒606-8501 京都市左京区吉田本町 京都大学大学院文学研究科 言語学研究室
電話 (075) 753-2862 Fax (075) 753-2827
 5. **その他** 採用された原稿及びフロッピーディスク類は返却いたしません。なお, 抜き刷りの印刷費用は原則として投稿者の負担とさせていただきます。ご了承ください。

編集後記

2000 年度の『京都大学言語学研究』（Vol.19）は、名称変更を機に編集体制を一新し、表紙の趣もかえました。発行に至るまでには、大勢の方々から多大なご協力をいただきました。この場を借りて、心より御礼申し上げます。

次号は、発刊 20 周年を迎え、よりいっそう、有意義に利用される雑誌をめざして、努力を重ねていきたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

編集委員長

2000年12月24日発行

編集委員長：大崎紀子

編集委員：岸田泰浩，庄垣内正弘，白井聡子，田窪行則，千田俊太郎，
永井佳代，西村周浩，朴永梅，藤代節，森若葉，
藪司郎，吉田和彦，吉田豊。（五十音順）

発行者：京都大学大学院文学研究科言語学研究室
〒606-8501 京都市左京区吉田本町

Edited by Noriko OHSAKI, Yasuhiro KISHIDA, Masahiro SHŌGAITO,
SHIRAI Satoko, Yukinori TAKUBO, TIDA Syuntaroo, Kayo
NAGAI, Kanéhiro NISHIMURA, FUJISHIRO Setsu, Wakaha
MORI, Shiro YABU, Kazuhiko YOSHIDA, Yutaka YOSHIDA.

Pubilished by Department of Linguistics
Graduate School of Letters, Kyoto University,
Yoshida-Honmachi, Sakyo-ku, Kyoto,
606-8501 Japan

Kyoto University Linguistic Research

Vol.19

Preface	1
Articles	
SASAKI, Tsuguya : Roots in Modern Hebrew	3
NISHIMURA, Kanéhiro : Latin <i>-issimus</i>	33
YAKUP, Abdurishid : A New <i>Cakrasamvara</i> Text in Uighur	43
OHSAKI, Noriko : On the Causative in Kyrgyz	59
KITANO, Hiroaki : The interactive uses of the anaphoric <i>soo</i> in Japanese conversational discourse	79
FUJISHIRO, Setsu : Identification and language change —on Turkic Language Area in Eurasia—	95
SAKAI, Hiromu : Classical Typology and Comparative Syntax : From the Analysis of Japanese Verbal Morphology	117
SHŌGAITO, Masahiro : Some Uighur fragments preserved in Russia and China —Ā gama sūtra, “Thousand Character Essay” and Tattvārthā—	147
Note	
IEMOTO, Taro : A note on Malayalam supine	193
The Annual Report of Kyoto University Linguistic Colloquium 2000	201



2000

Department of Linguistics
Graduate School of Letters
Kyoto University